第 28 回

岐阜県国保地域医療学会

演題抄録集

開 催 日：令和５年１１月１９日（日）

会　　場：はなのき会館、別館
（岐阜県加茂郡東白川村神土６０６）

岐阜県国民健康保険診療施設協議会

岐阜県国民健康保険団体連合会

第２７回岐阜県国保地域医療学会優秀研究発表者

（第６３回全国国保地域医療学会における研究発表推薦者）

	演　　題　　名	発 表 者
最優秀	〈教育・保健・在宅〉 魅力ある里山ナース院内認定制度について	国保飛騨市民病院 看護師　　宮腰　結衣　氏
優　秀	〈コロナ時代から新時代への地域包括医療・ケア（１）〉 院内デイケアで入院生活を活性化する ～見えてきた成果と今後の課題～	国保飛騨市民病院 看護師　　大庭　のりこ　氏
優　秀	〈看護・介護・栄養〉 その人らしくを支える退院支援をめざして ～療養病棟における退院チェックシートの作成～	国保飛騨市民病院 看護師　　星合　紀美子　氏
優　秀	〈リハビリテーション〉 ＩＣＴを活用した多職種連携の必要性と推進への取り組み	国保飛騨市民病院 理学療法士　巣之内　大輔　氏

※〈　　〉については、演題分類を表示。

第６３回全国国保地域医療学会における

岐阜県国保診療施設協議会　共同研究発表者

演　　題　　名	発 表 者
岐阜県国保直診関係者における【2040 年問題】に対する意識調査	県北西部地域医療センター 国保和良歯科診療所 所　長　　南　　温　氏

メインテーマ

「国保直診　元気を出そう！」

開 催 日　令和５年１１月１９日（日）午後１時～

会　　場　はなのき会館、別館（岐阜県加茂郡東白川村神土６０６）

学 会 長　東白川村国保診療所長　　北　川　　浩　司

副学会長　恵那市国保岩村診療所長　　前　野　　禎

目　　次

第２８回岐阜県国保地域医療学会開催要領 …… １
交　通　案　内 …… ４
会　場　案　内 …… ５
日　　程　　表 …… ６
特　別　講　演 …… ７
「地域医療30年で学んだ 人生100年時代の健幸学」

研究発表索引 …… １１
研究発表・座長一覧表 …… １６
演　　題
第１会場
セクション１　No. 1～No. 3 …… １８
セクション２　No. 4～No. 6 …… ２１
セクション３　No. 7～No. 9 …… ２４
セクション４　No. 10～No. 13 …… ２７
第２会場
セクション５　No. 14～No. 17 …… ３２
セクション６　No. 18～No. 20 …… ３６
セクション７　No. 21～No. 23 …… ３９
セクション８　No. 24～No. 26 …… ４２

〔参考〕
Ⅰ．岐阜県国民健康保険診療施設紹介 …… ４６
Ⅱ．第２８回岐阜県国保地域医療学会実行委員会　委員名簿 …… ４９
Ⅲ．第６４回全国国保地域医療学会開催概要 …… ５０

第２８回岐阜県国保地域医療学会開催要領

１　目　　的

　高齢化が進展するなか、国民健康保険診療施設関係者が参集し、地域医療及び地域包括ケアの実践の方途を探求するとともに､相互理解と研鑽を図ることを目的とする。

２　主　　催

　岐阜県国民健康保険診療施設協議会
　岐阜県国民健康保険団体連合会

３　後　　援

　岐阜県
　岐阜県国保診療施設開設者協議会
　岐阜県市町村保健活動推進協議会保健師部会

４　参 加 者

　国民健康保険診療施設に勤務する全ての職員及び国民健康保険関係者並びに志を同じくするものとする。

５　日　　時

　令和５年１１月１９日（日）　午後１時～

６　場　　所

　はなのき会館、別館
　岐阜県加茂郡東白川村神土６０６　ＴＥＬ（０５７４）７８－３２８８

７　研究発表

（１）演題分類

①臨床に関するもの（臨床研究・症例報告）
②臨床検査に関するもの
③放射線検査・治療と画像診断に関するもの
④薬剤・薬局に関するもの
⑤リハビリテーション・理学療法に関するもの
⑥歯科・口腔に関するもの
⑦食事・栄養管理に関するもの
⑧看護研究に関するもの
⑨看護業務に関するもの
⑩患者サービス・支援に関するもの
⑪安全管理・感染防御・災害対策に関するもの
⑫診療施設の運営・管理に関するもの（診療体制・事務など）
⑬連携に関するもの（多職種・住民・行政・施設間など）
⑭人材確保・教育に関するもの
⑮在宅医療・ケアに関するもの
⑯ターミナルケアとそれに関連するもの
⑰介護に関するもの（在宅・施設）
⑱保健事業（介護予防）・健診・予防に関するもの
⑲健康作り・患者会・教室・健康関連行事に関するもの
⑳住民団体（患者側）・ボランティア・まちづくりに関するもの
㉑その他

（２）発表形式（口演発表）

①発表時間　１演題　５分間

※演題数により、多少変更する場合がありますのでご了承ください。

②ディスカッション　１演題　２分間

③パソコンによる発表

学会の各会場にパソコン(Windows ﾊﾟﾜｰﾎﾟｲﾝﾄ。バージョンは後日指定)を設置します。発表者は演題ごとの研究発表のデータファイルをUSBメモリー（又はCD-R、DVD-R）にて、各自ご持参ください。（動画及びスライドの自動切替設定については、原則使用不可とします。）

８　メインテーマ　「　国保直診　元気を出そう！　」

９　特別講演

演　　題　「地域医療30年で学んだ 人生100年時代の健幸学」

講　　師　全国国民健康保険診療施設協議会副会長

福井県：おおい町国民健康保険名田庄診療所長　　中村　伸一　氏

司 会 者　第２８回岐阜県国保地域医療学会長　　北川　浩司

10　優秀研究発表者の表彰

今学会で発表された演題の中から優秀であるものを選考（最優秀、優秀）し、後日表彰いたします。

なお、被表彰者については岐阜県国保診療施設協議会推薦として、第６４回全国国保地域医療学会において発表を行っていただきます。

11　申し込みの案内等

（１）研究発表（演題・抄録原稿）

①発表者は、演題募集要領に基づき「第２８回岐阜県国保地域医療学会演題申込書」により、施設・市町村ごとに事務局へメールにて申込みをしてください。

【申込期日：５月１９日（金）まで】

②抄録原稿は、発表申込みのあった施設・市町村に、抄録原稿記入要領を送付（７月上旬）しますので、要領により事務局へメールにて提出してください。

【提出期日：８月１８日（金）まで】

③発表者の所属・氏名、演題、抄録内容等については、本会ホームページや機関誌等にて公表させていただく場合があります。

（２）学会参加（発表者も申込みが必要です）

①「参加申込書」により事務局へメールにて申込みをしてください。

【申込期日：９月１日(金)から１０月６日(金)まで】

※各施設・市町村関係者等へは、参加申込書の案内を別途送付いたします。

（３）「第２８回岐阜県国保地域医療学会演題申込書」「参加申込書」は、「岐阜県国民健康保険団体連合会ホームページ」の「岐阜県国保地域医療学会」内よりダウンロードしてください。

(http:/ www.gkren.jp/hospital/academic_conference.html)

（４）申込・提出先「学会事務局：国保連合会」

メール：kenkou-kedu2@gifukokuho.or.jp（演題、抄録原稿、参加申込み）

12　演題抄録集について

演題抄録集については、冊子での配布はいたしません。取得方法につきましては、本会ホームページより、必要な部分を個人でご準備いただくようお願いいたします。

13　そ の 他

学会参加者に対し、「学会参加証明書」を発行いたします。

なお本証明書は、「地域包括医療・ケア」の更新にあたり、更新証明書に添付する実績報告書として使用可能です。

【事 務 局】

〒５００－８３８５

岐阜市下奈良２丁目２番１号　岐阜県福祉・農業会館内

岐阜県国民健康保険団体連合会　健康推進課　健康づくり係

ＴＥＬ（０５８）２７５－９８２３

Ｅ－ｍａｉｌ：kenkou-kedu2@gifukokuho.or.jp

【開催担当地区】

〒５０９－１３９３

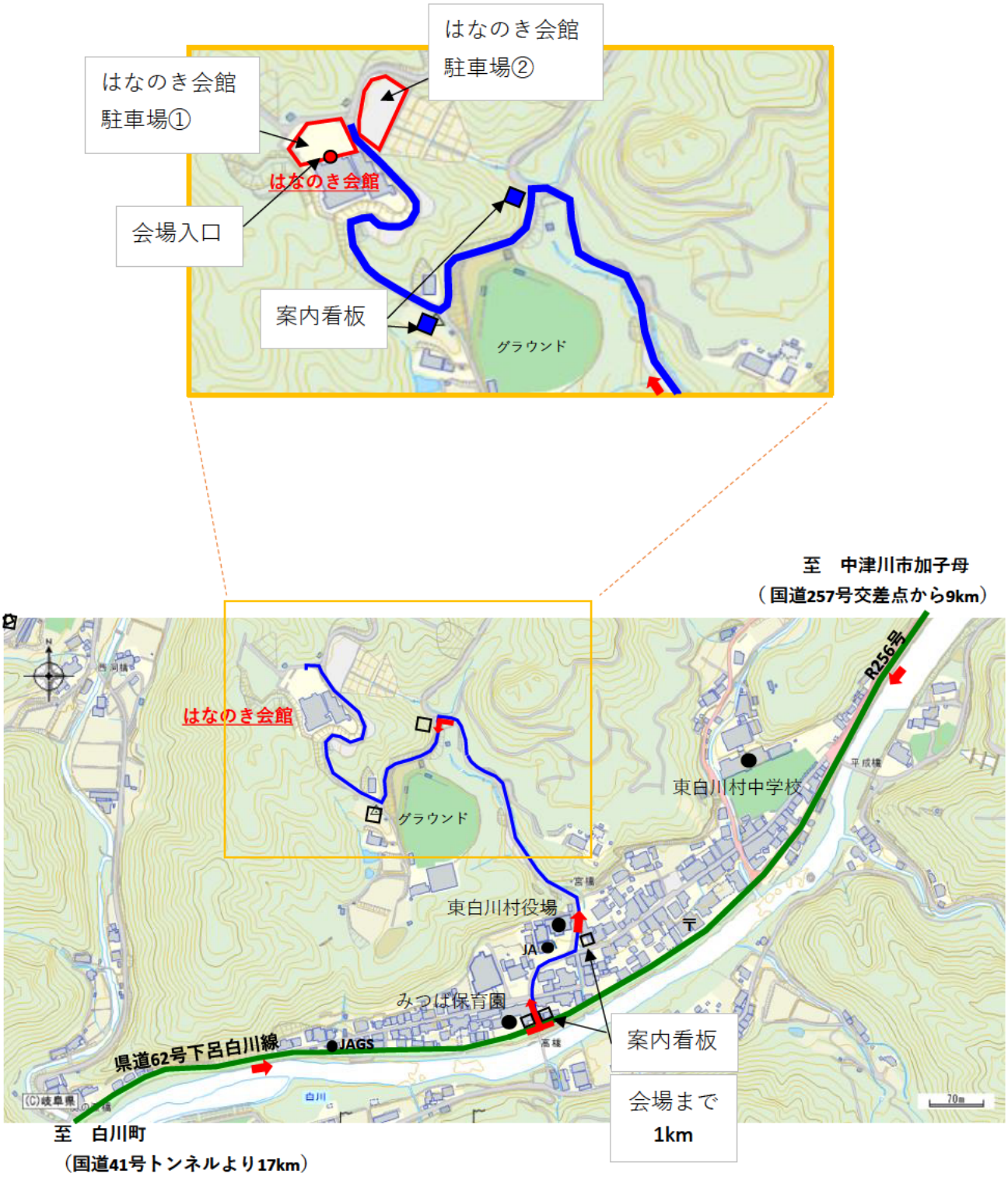
岐阜県加茂郡東白川村五加３２１０番地

東白川村国保診療所

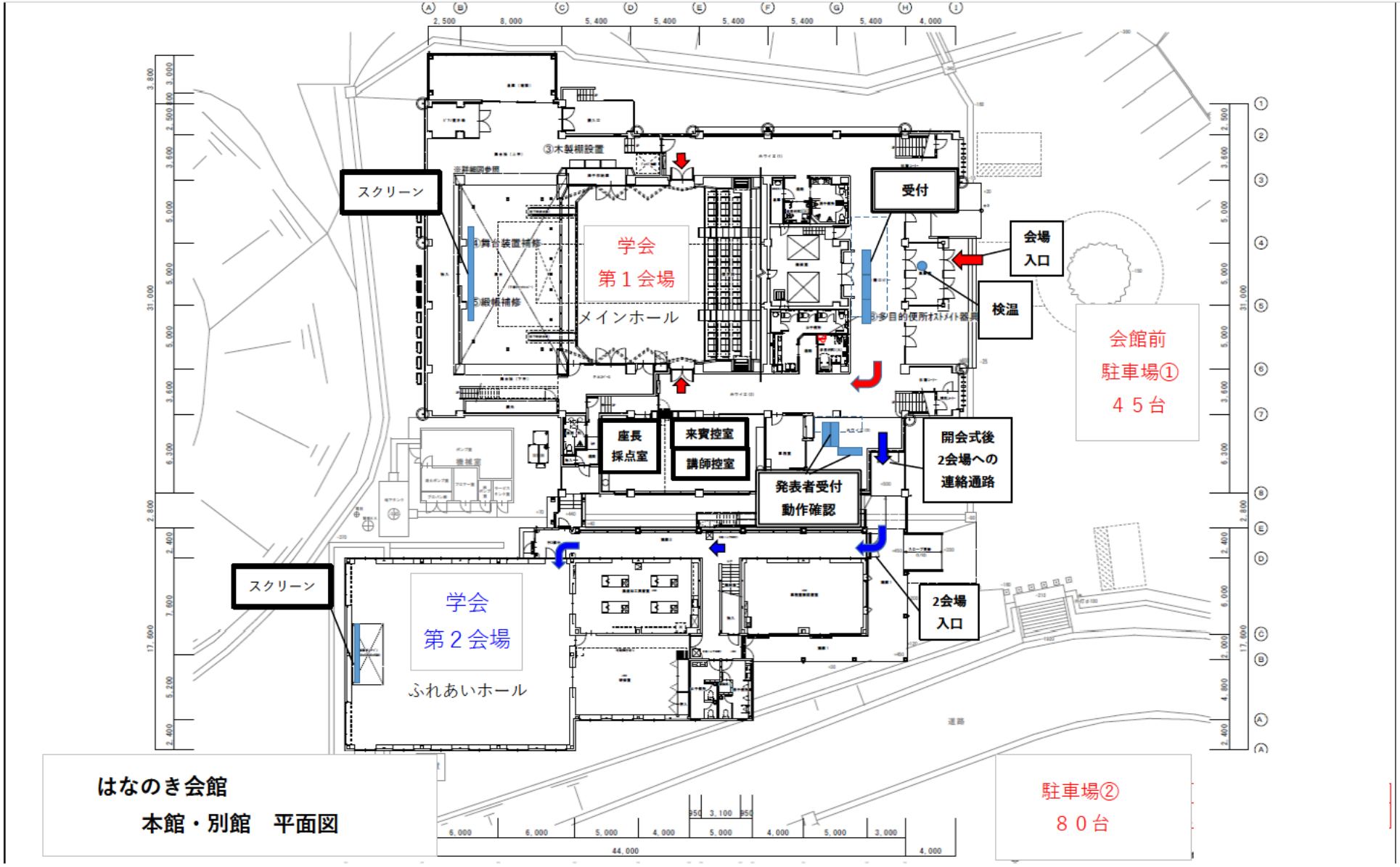
ＴＥＬ（０５７４）７８－２０２３

Ｅ－ｍａｉｌ： 507hospital@vill.higashishirakawa.gifu.jp

《東白川村はなのき会館周辺アクセス図》



はなのき会館施設平面図



第28回岐阜県国保地域医療学会日程表

12:00　13:00　13:3　15:10　15:25　16:45　16:55

	60分	30分	100分	15分	80分	10分
日程	受付	開会式	＜研究発表＞ ○口演発表 　1演題7分（発表5分、質疑2分） **※申込演題を2会場（13演題づつ）に分散します。**	休憩	＜特別講演＞ 司　会 第28回岐阜県国保地域医療学会学会長 北川　浩司 演　題 「地域医療30年で学んだ 人生100年時代の健幸学」 講　師 全国国民健康保険診療施設協議会副会長 福井県：おおい町国民健康保険名田庄診療所 所長　中村　伸一　氏	閉会式

特別講演

「地域医療 30 年で学んだ 人生 100 年時代の健幸学」

講　　師　　全国国民健康保険診療施設協議会副会長　　中　村　伸　一

（おおい町国民健康保険名田庄診療所長）

（ＮＰＯ法人Ｊ－ＨＯＰＥ　理事長）

司 会 者　　第２８回岐阜県国保地域医療学会長　　北　川　浩　司

（東白川村国保診療所長）

地域医療 30 年で学んだ
人生 100 年時代の健幸学

全国国民健康保険診療施設協議会 副会長
おおい町国民健康保険名田庄診療所 所長
ＮＰＯ法人Ｊ－ＨＯＰＥ　理事長
中村 伸一

本来、医療は健康になるため、健康は幸せになるための手段のはずです。医療行為や健康は、それ自体が目的ではありません。人生 100 年時代といわれる今、患者側も医療者側もほんの少し俯瞰することで、自らと社会全体の幸せを考え直した方がよさそうです。

戦後、経済が発展して一人当たり GDP（国内総生産）が数倍に上昇したのに、日本人の幸福度（主観的幸福感）は変わりませんでした。また、ある調査によると、アメリカ人の幸福度は 30 代で最低になりますが、その後は年齢を重ねるごとに上昇します。対照的に日本人では、調査を開始する 15 歳が幸せのピークで、年齢とともに幸福度は右肩下がりに減少します。私たち日本人は年をとっても幸せをもっと感じてよいのではないでしょうか。

人が幸せになるための方法は実に多様であることが、科学的にも証明されつつあります。笑顔で暮らしたり、ポジティブな考え方をもったり、感謝の気持ちを伝えたり、人とつながりをもったり、自分の強みを活かして行動したりすることが、本当に幸せにつながるようです。従来の道徳や宗教の教えが本当に正しかったのだと、後追いでわかってきました。

医療を適切に利用しつつも医療だけに頼ることなく、私たちが自ら実践することで、今よりずっと幸せになる方法をいっしょに探っていきましょう！

略　　歴

中村　伸一（なかむら　しんいち）

全国国民健康保険診療施設協議会 副会長
おおい町国民健康保険名田庄診療所 所長
ＮＰＯ法人Ｊ－ＨＯＰＥ 理事長
元 自治医科大学医学部地域医療学 臨床教授

【　プロフィール　】

昭和３８年生まれ。平成元年に自治医科大学を卒業。
平成３年に旧名田庄村（おおい町名田庄地区）に赴任し、同地区唯一の医療機関である国保名田庄診療所の所長となる。
総合医として幅広い診療で人口約３０００人の地域医療を支え、保健・医療・福祉の連携により旧名田庄村の老人医療費や第１号介護保険料を福井県内で最も低いランクに抑えることを実現した。赴任後から町村合併するまでの在宅死亡率は約４割であった。
また、日本専門医機構の総合診療専門医検討委員会ワーキンググループの委員として、総合診療の新たな制度設計に関わった。

【　著　書　】

『自宅で大往生－「ええ人生やった」と言うために－』（中公新書ラクレ）
『寄りそ医－支えあう住民と医師の物語－』（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）
『サヨナラの準備』（メディアファクトリー）
『入門！自宅で大往生－あなたもなれる「家逝き」達人・看取り名人』（中公新書ラクレ）

【　テレビ・ラジオ出演　】

平成２１年、『プロフェッショナル仕事の流儀』（ＮＨＫ）に出演。

平成２４年９月、『寄りそ医』を原案にした小池徹平主演の『ドロクター』（ＮＨＫ-ＢＳプレミアム）が放映。

平成２５年、『Ｎスタ』（ＴＢＳ）に出演。

平成２８年から、『早川一光のばんざい人間』（ＫＢＳ京都ラジオ）にゲストとして定期的に出演。

研　究　発　表　索　引

【第１会場】

セクション１

〔座　長〕　県北西部地域医療センター国保白鳥病院　副院長　廣瀬　英生

No. 1	認知症ケアにおける情報収集・共有・活用	国保上矢作病院	(看護師) 片桐　由美	P18
No. 2	家族とともに行う環境調整 ～せん妄予防・ケアの観点から～	国保飛騨市民病院	(看護師) 南下　夏美	P19
No. 3	“人生 100 年！自分の足で歩ける”を支援して ～外来待ち時間に長寿を贈る～	国保飛騨市民病院	(看護師) 谷村　こずえ	P20

セクション２

〔座　長〕　国保上矢作病院　看護部長　原田　江里子

No. 4	面会制限下における患者・家族をつなぐ看護 ～患者の想いをそっと手紙にのせて～	国保飛騨市民病院	(看護師) 荒家　千夏	P21
No. 5	長期入院患者と家族との関わりについて ～アンケート調査から見えてきた家族の思い～	下呂市立金山病院	(看護師) 今井　美咲	P22
No. 6	その人らしさを大切にする看護を目指して ～スタッフの ACP を深める取り組みを行って～	国保飛騨市民病院	(看護師) 松葉　明美	P23

セクション３

〔座　長〕　飛騨市国保宮川診療所　所長　根尾　浩

No. 7	フットケアの試みから介護サービスの利用にも繋がった一例	東白川村国保診療所	(看護師) 瀬戸垣　静	P24
No. 8	白鳥ブランドの予診を目指して	県北西部地域医療ｾﾝﾀｰ 国保白鳥病院	(看護師) 山下　美由紀	P25
No. 9	訪問看護ステーションでの移動時間確保	県北西部地域医療ｾﾝﾀｰ 国保白鳥病院	(看護師) 鷲見　みづほ	P26

セクション４

〔座　長〕　恵那市国保山岡診療所　事務長　水野　修宏

No. 10	食べることを大切にできる子の育成の取り組み ～保護者・園・学校・行政で連携する 明宝学校地域保健連絡会～	郡上市健康福祉部 健康課	(保健師) 早川　由美子	P27
No. 11	飛騨市の子育て世代における塩分摂取状況について	飛騨市市民福祉部 保健センター	(保健師) 川瀬　春香	P28
No. 12	山間部の拠点病院におけるソーシャルワーカーの外部連携	国保上矢作病院	(医療相談員) 伊藤　貴範	P29
No. 13	サロンマップ ～地域活動へつなげる取り組み～	県北西部地域医療ｾﾝﾀｰ 国保白鳥病院	(社会福祉士) 尾藤　陽介	P30

【第２会場】

セクション５

〔座　長〕　下呂市立金山病院　課長　亀山　嘉人

No. 14	病院職員の健康における食事療法の有用性 ～ケトジェニックダイエットプロジェクトの成果～	国保飛騨市民病院	(看護師) 山端　美奈子	P32
No. 15	「持たない・割かない・増やさない」画期的な研修医住宅整備手法 ～快適で喜ばれる研修環境が身軽な病院経営をもたらしてくれた～	国保飛騨市民病院	(事務) 佐藤　直樹	P33
No. 16	介護認定審査会のオンライン実施への移行に関する実績と課題について	郡上市健康福祉部 高齢福祉課	(事務) 山岡　友哉	P34
No. 17	第３期郡上市国保データヘルス計画策定に取り組んで	郡上市健康福祉部 保険年金課	(事務) 若園　紗矢香	P35

セクション６

〔座　長〕　本巣市国保根尾診療所　医師　香田　弘司

No. 18	人材確保・教育に懸けた「里山ナース®院内認定制度」～５年の歩みとその成果～	国保飛騨市民病院	(看護師) 岩﨑　美幸	P36
No. 19	当地域医療センターにおける「総合診療」に対するスタッフの意識調査の変化について ～「総合診療カフェ」の開催を通して～	県北西部地域医療ｾﾝﾀｰ 国保白鳥病院	(医師) 廣瀬　英生	P37
No. 20	医学生の早期体験実習の受け入れを経た当診療所職員の受け入れの実際と効果について	高山市 国保久々野診療所	(医師) 児玉　一貴	P38

セクション７

〔座　長〕　下呂市立小坂診療所　所長　草壁　駿輝

No. 21	当院におけるメトホルミンとビタミンB12・貧血の関係について	高山市 国保朝日診療所	(医師) 阪　哲彰	P39
No. 22	胃Ｘ線画像と H. pylori 菌抗体値の検討	国保上矢作病院	(診療放射線技師) 籠橋　隆司	P40
No. 23	嚥下反射惹起遅延に対する、干渉波電気刺激治療の有効性について	国保飛騨市民病院	(作業療法士) 今井　亮貴	P41

セクション８

〔座　長〕　国保関ケ原診療所　所長　森島　眞理子

No. 24	地域における HPV ワクチン接種の実施状況に関して	県北西部地域医療ｾﾝﾀｰ 国保和良診療所	(医師) 堀　翔大	P42
No. 25	FLS チームにおける二次骨折予防に向けた取り組み	下呂市立金山病院	(診療放射線技師) 細江　辰徳	P43
No. 26	東白川村民の死因と看取り場所の変遷	東白川村国保診療所	(医師) 神谷　理斗	P44

研究発表・座長一覧表　　第1会場　はなのき会館ホール　13:30～　、　第2会場　別館ふれあいホール　13:30～

会場	セクション	座長	番号	演題	所属	職種	発表者	発表時間
第1会場	1	県北西部地域医療センター 国保白鳥病院 副院長兼小那比診療所長 廣瀬　英生氏	1	認知症ケアにおける情報収集・共有・活用	国民健康保険上矢作病院	看護師	片桐　由美	13:32～13:38
			2	家族とともに行う環境調整 ～せん妄予防・ケアの観点から～	国民健康保険飛騨市民病院	看護師	南下　夏美	13:39～13:46
			3	”人生100年！自分の足で歩き続ける”を支援して ～外来待ち時間に長寿を贈る～	国民健康保険飛騨市民病院	看護師	谷村　こずえ	13:47～13:53
	2	国民健康保険上矢作病院 看護部長 原田　江里子氏	4	面会制限下における患者・家族をつなぐ看護 ～患者の想いをそっと手紙にのせて～	国民健康保険飛騨市民病院	看護師	荒家　千夏	13:55～14:02
			5	長期入院患者と家族との関わりについて ～アンケート調査から見えてきた家族の思い～	下呂市立金山病院	看護師	今井　美咲	14:03～14:10
			6	その人らしさを大切にする看護を目指して ～スタッフのACPを深める取り組みを行って～	国民健康保険飛騨市民病院	看護師	松葉　明美	14:11～14:18
	3	飛騨市国保宮川診療所 所長　根尾　浩氏	7	フットケアの試みから介護サービスの利用にも繋がった一例	東白川村国保診療所	看護師	瀬戸垣　静	14:19～14:26
			8	白鳥ブランドの予診を目指して	県北西部地域医療センター国保白鳥病院	看護師	山下　美由紀	14:27～14:34
			9	訪問看護ステーションでの移動時間確保	県北西部地域医療センター国保白鳥病院	看護師	鷲見　みづほ	14:35～14:41
	4	恵那市国保山岡診療所 事務長 水野　修宏氏	10	食べることを大切にできる子の育成の取り組み ～保護者・園・学校・行政で連携する明宝学校地域保健連絡会～	郡上市健康福祉部健康課	保健師	早川　由美子	14:43～14:50
			11	飛騨市の子育て世代における塩分摂取状況について	飛騨市市民福祉部保健センター	保健師	川瀬　春香	14:51～14:57
			12	山間部の拠点病院におけるソーシャルワーカーの外部連携	国民健康保険上矢作病院	医療相談員	伊藤　貴範	14:59～15:05
			13	サロンマップ ～地域活動へつなげる取り組み～	県北西部地域医療センター国保白鳥病院	社会福祉士	尾藤　陽介	15:07～15:14
第2会場	5	下呂市立金山病院 課長　亀山　嘉人氏	14	病院職員の健康における食事療法の有用性 ～ケトジェニックダイエットプロジェクトの成果～	国民健康保険飛騨市民病院	看護師	山端　美奈子	13:32～13:38
			15	「持たない・割かない・増やさない」 画期的な研修医住宅整備手法 ～快適で喜ばれる研修環境が身軽な病院経営をもたらしてくれた～	国民健康保険飛騨市民病院	事務	佐藤　直樹	13:39～13:46
			16	介護認定審査会のオンライン実施への移行に関する実績と課題について	郡上市健康福祉部高齢福祉課	事務	山岡　友哉	13:47～13:53
			17	第３期郡上市国保データヘルス計画策定に取り組んで	郡上市健康福祉部保険年金課	事務	若園　紗矢香	13:55～14:02
	6	本巣市国保根尾診療所 医師　香田　弘司氏	18	人材確保・教育に懸けた「里山ナース®院内認定制度」 ～５年の歩みとその成果～	国民健康保険飛騨市民病院	看護師	岩﨑　美幸	14:03～14:10
			19	当地域医療センターにおける「総合診療」に対するスタッフの意識調査の変化について～「総合診療カフェ」の開催を通して～	県北西部地域医療センター国保白鳥病院	医師	廣瀬　英生	14:11～14:18
			20	医学生の早期体験実習の受け入れを経た当診療所職員の受け入れの実際と効果について	高山市国民健康保険久々野診療所	医師	児玉　一貴	14:19～14:26
	7	下呂市立小坂診療所 所長　草壁　駿輝氏	21	当院におけるメトホルミンとビタミンB12・貧血の関係について	高山市国民健康保険朝日診療所	医師	阪　哲彰	14:27～14:34
			22	胃X線画像とH.pylori菌抗体値の検討	国民健康保険上矢作病院	診療放射線技師	籠橋　隆司	14:35～14:41
			23	嚥下反射惹起遅延に対する干渉波電気刺激治療の有効性について	国民健康保険飛騨市民病院	作業療法士	今井　亮貴	14:43～14:50
	8	国保関ケ原診療所 所長　森島　眞理子氏	24	地域におけるHPVワクチン接種の実施状況に関して	県北西部地域医療センター国保和良診療所	医師	堀　翔大	14:51～14:57
			25	FLSチームにおける二次骨折予防に向けた取り組み	下呂市立金山病院	診療放射線技師	細江　辰徳	14:59～15:05
			26	東白川村民の死因と看取り場所の変遷	東白川村国保診療所	医師	神谷　理斗	15:07～15:14

※座長依頼の調整の結果、セクション1及び2の各演題番号が変更となりましたのでご注意ください。
セクション1　⇔　セクション2が入れ替え
演題番号1～3　⇔　演題番号4～6が入れ替え

第　１　会　場

セクション１　　No.　１～No.　３

セクション２　　No.　４～No.　６

セクション３　　No.　７～No.　９

セクション４　　No.１０～No.１３

演題番号1

認知症ケアにおける情報収集・共有・活用

国民健康保険上矢作病院　看護部
看護師　○片桐由美　金子美嘉乃　原　良子
小橋川晃代　西尾ちとせ

【はじめに】
認知症高齢者の入院は、個々の認知症状に合わせた対応が必要となる。看護職員に認知症ケアでの困り事、対策についてアンケート調査を行ったところ、帰宅願望や徘徊行為のある患者の対応に戸惑うとの意見が多かった。以前、帰宅願望が強いアルツハイマー型認知症患者に、趣味の楽器演奏を取り入れたところ、落ち着いて入院生活を送ることが出来た。この事例から患者の病状や現在の姿だけでなく、今までの生活情報を取り入れる事が入院生活の安定につながる重要なことだと分かった為、入院時に生活情報を収集、共有し入院生活に活用していけるよう取り組んだ。

【目的】
患者の生活情報を収集し可視化する事で、その人に合った日課や興味のある事を看護職員全員で共有し看護に活用する。

【取り組みの内容】
生活情報を収集する用紙を作成し、入院時情報収集した内容を取り入れ認知症ケアを実践する。

【結果】
生活情報用紙がコミュニケーションのヒントとなり、娯楽道具を使用し職員の声かけが増えた事によって入院生活の安定に繋がった。そしてこの取り組みは職員間で共有され活用する事が出来たと考えている。

演題番号2

家族とともに行う環境調整
～せん妄予防・ケアの観点から～

国民健康保険飛騨市民病院　1病棟
看護師　○南下夏美　大坂高子
神田敏子　後藤弘子　岩﨑美幸

【目的】せん妄予防・ケアとして、環境調整に焦点をあてた看護を実践し得られた成果と課題を明らかにする。
【研究方法】対象者：せん妄スクリーニングに1つ以上該当し同居家族がいる患者。方法①せん妄についての勉強会を開催②せん妄についての冊子作成③患者家族に冊子を使用し説明④家族より患者の好きなもの、習慣を情報収集。なじみのものを病院でも使用継続⑤カルテ内で情報共有、日々の看護に取り入れる⑥病棟の看護師にアンケート実施
【結果】毎日患者の好きな食べ物とお品書きを渡してくれた家族もおり、家族の協力は大きいものであった。患者のベッド周囲には家族を感じることが出来る写真や手紙を見える所に設置した。アンケート結果：【環境調整の取り組み】では 87.5%≪良い≫≪継続≫≪明るい環境≫≪期待≫が占めた。【患者への影響】の 73.3%は≪精神安定≫≪穏やか≫≪せん妄予防≫が占めた。【看護師と患者の関係性】では、≪会話のきっかけ≫≪患者尊重≫を抽出した。
【考察】せん妄に対する【環境調整の取り組み】の重要性を認識し、馴染みのある習慣を取り入れようと家族に働きかける意識がとても重要であると考えられた。看護師と家族がともに患者への環境調整を行うことが患者にとって≪精神安定≫≪穏やか≫≪せん妄予防≫に繋がり、患者・家族・看護師にとっての満足度に繋がったと考えられる。
【結論】看護師として環境調整の重要性を認識し、家族と協同して患者の日常生活に近い環境に整えることが、せん妄予防とケアに繋がる。さらに患者・家族・看護師にとっての満足度に繋がる。今後の課題として、環境調整以外の幅広い視点でのアセスメントを行い、さらに個別性を深めたケアの提供を行うことである。

演題番号3

“人生100年！自分の足で歩き続ける”を支援して
～外来待ち時間に長寿を贈る～

国民健康保険飛騨市民病院
看護師　○谷村こずえ　岩﨑美幸
理学療法士　巣之内大輔
医師　金森昌彦

【はじめに】要介護となる原因の約2割は運動機能の障害であることが分かっており、移動機能の低下は早い人で40歳代から始まると言われている。下肢の筋力低下によって、段差でつまずき、バランスを崩して転倒し骨折するケースがある。骨折し寝たきりとなってしまっては、豊かな老後からはほど遠い状況となり楽しみが奪われてしまう。そうならない為には、運動機能の低下予防に早期から取り組むことがとても重要である。

【目的】ロコモ度チェック、足趾力測定、バランス感覚を測定し、健康に対する意識の変化によって、高齢者が運動機能低下予防に取り組めることを目的とする。

【対象と方法】１）外来待ち時間を活用し、測定を希望するADL自立の65歳以上の外来通院患者を対象とする。

２）①『ロコモ25』チェックを実施する。

②足趾力（足趾挟力・足趾握力・足趾俊敏力）測定を実施する。

③バランス感覚測定を実施する。

３）測定後に測定結果説明を行い、健康に対する意識変化のアンケートを実施する。

【まとめ】この取り組みは‘まめなかなプロジェクト’by飛騨市民病院の一環である。地域住民が自身の健康を意識し、一人でも多くの高齢者が自分の足で歩いて自分らしく豊かな生活を送ることができることを期待している。測定機器を準備し、健康への意識変化に向けた取り組みの体制を整えているところである。発表では、取り組みの成果を報告する。

演題番号4

面会制限下における患者・家族をつなぐ看護
～患者の想いをそっと手紙にのせて～

国民健康保険飛騨市民病院　1病棟
看護師　○荒家千夏　岩﨑美幸

【目的】新型コロナウイルス感染症に伴った面会制限による家族の不安に対し、受け持ち看護師として患者の様子を写真と手紙で伝えることにより家族の不安軽減につなげる

【方法】

①　期間：2022年12月～2023年3月まで

②　受け持ち看護師により患者の様子を写真や手紙にして家族に渡す

③　病棟師長が家族に対して聞き取り調査

【結果・考察】面会制限で入院中の患者の姿を見たり声を聞く機会がない事から、療養生活の様子を写真や手紙にすることで患者を身近に感じてもらいたいと考えた。動きがある映像ではないため、一方的な意味合いが大きいと考えていたが「入院中の○○の思っている事をしれて良かった」「忘れていたと思っていたが△△のことを覚えていてくれてうれしい」などの意見があった。また患者本人が家族に手紙を送られることもあり「初めて父にお礼を言ってもらえた」など患者の残存機能で文字にしたためる姿への驚きと、娘である自分をおもんぱかる親心について感動される場面もあった。患者の生の声と想いを手紙に綴り、患者の笑顔や療養の様子を見て家族の喜びとなり不安の軽減に繋がったと考える。そのため相手の理解度、求めていることは何かを確認していくことが必要となる。また、手紙にのせる取り組みを行なうことで受け持ち看護師が患者の発する言葉や言動の意味をより深く考えながら積極的に関わったことが、家族支援に繋がったと考える。

【結語】面会制限による家族の不安に対し、受け持ち看護師として患者の療養中の様子や想いを写真と手紙により伝えたことで家族の不安軽減に繋がった。今後は看護師が患者への関心をもって関わり意図的な介入をしていけるよう取り組んで行きたい。

演題番号5

長期入院患者と家族との関わりについて
～アンケート調査から見えてきた家族の思い～

下呂市立金山病院　療養病棟
看護師　○今井美咲　　眞野栄子
中島亜歩美　加藤富美子
佐橋美和　　馬場容子

【はじめに】当院は、一般病棟（包括病床含む）と療養病棟を有している。急性期治療が終わりリハビリ目的や退院が決まらず調整中の患者が療養病棟へ転棟となる。患者情報は、定期的に退院調整会議を行い、看護サマリーと入退院支援スクリーニングシートを用いて共有しているが、急性期に患者家族と時間をかけて十分な話し合いを行うことが出来ないまま経過しているのが現状である。当地域は高齢世帯や独居の家庭が多く、医療依存度の高い患者や、介護を必要とする患者は、本人が自宅への退院を希望しても、希望に添うことが出来ない症例が多い。そのため、長期入院患者の家族が実際、現状をどのように受け止め、今後についてどのように考えているのかを把握し、少しでも患者に寄り添いたいと考えた。残された人生をどう過ごすのがよいのか、今まで踏み込めなかったところを深く理解し、医療従事者として地域の医療福祉機関と連携を深めた計画を立て、看護を提供することで患者家族の満足度を得ることが出来ないか検討した。

【研究目的・方法】面会や外出・外泊制限があり、医療スタッフと患者家族が話をする機会が少ない。患者家族が、どのように考え、何を望んでいるのかを知るため、入院後 1 年以上経過し、医療処置が必要な患者 7 名にアンケート調査を実施した。

【結果・考察】今回調査対象となった患者家族の多くは、患者が入院していることで安心であり満足しているという意見であった。アンケート記載が、家族間で話し合うきっかけとなることを期待したが、キーパーソンのみでの回答となり、今後どうしたいのかを考える機会とはならなかった。患者家族ともに高齢となり、今後どうしたいのか、キーパーソンはどうするのかを考えていく必要がある。

演題番号6

その人らしさを大切にする看護を目指して
～スタッフのACPを深める取り組みを行って～

国民健康保険飛騨市民病院
看護師　○松葉明美　下方幸子
荒家千夏　岩﨑美幸

【目的】療養病棟に入院する患者の、その人らしさを大切にした看護ができるよう、看護師のACPに対する意識の向上につとめる。
【研究方法】期間　令和4年4月～12月
対象者　療養病棟スタッフ（看護師13名　介護福祉士1名　看護補助者1名）
方法　①勉強会前のスタッフへの意識調査（令和4年4月）
②勉強会の開催：内容　4月研究チームよりACPについて勉強会の実施
5月：飛騨市終活アドバイザーによる、飛騨市終活支援センターが作成したACPノート『わたしのこころづもり』講演会開催
その後ACPシート『わたしのこころづもり』の記入
10月・12月看護師・患者役を設定しロールプレイの実施
③勉強会後のスタッフへの意識調査（令和4年12月）
【結果】4月の意識調査（回答率100%）でACPを「知らない」が全体の40%「知っているが具体的には知らない」が44%と合わせると84%のスタッフがACPに対する認識が低かった。勉強会・ロールプレイを重ねた結果、12月の意識調査では、「ACPを知ることができた」60%・「知っていたがより知識を深めることができた」40%を合わせて100%となり、勉強会の効果が現れている結果であった。12月の意識調査では、ACPを心がけて患者と接することができたというスタッフがいた。『わたしのこころづもり』の記入・ロールプレイは、相手の立場に自分を置き換えて考える機会になった。そのことがACPの大切さを実感することとなり、患者の思いを聞いてその人に寄り添える看護をしたいなどの意見につながった。この結果より、スタッフの意識の向上が、その人らしさを大切にする看護につながると考えられた。
【結論】①療養病棟におけるACPの勉強会を行ったことで、看護師のACPに対する意識の向上につながった。②看護師のACPに対する意識の変化は、患者へのその人らしさを大切にする看護につながる。③その人らしさを大切にする看護の提供には、看護師へのACPを深める定期的な勉強会が必要である。

演題番号7

フットケアの試みから
介護サービスの利用にも繋がった一例

東白川村国保診療所
看護師　○瀬戸垣静　樋口亜生　榊間るみ
今井利佳　苅田和子　桂川恵美
岐阜県総合医療センター
医師　田口　潤

平成 30 年 3 月に当診療所で、足のナースクリニック代表 西田壽代先生による「明日からできる！フットケア」の講演を受けた。それまで外来通院中の患者の足の観察が不十分であったことを反省し、高齢者が自分の足で歩行出来るよう、足に関わるトラブルを早期発見し治療に繋げることを目的としたフットケアの取り組みを開始した。継続的なケアから身体状況の改善および介護負担の軽減に繋げることができた症例について報告する。

対象者は肥満(BMI 30)、糖尿病、高血圧症、両膝変形性膝関節症のため通院中の 84 歳女性。下腿浮腫が目立ち、両足白癬も認められた。独居であり頑固で閉鎖的な性格から介護サービスは拒否され、長女が毎日訪問していたが保清は困難であった。期間は平成 31 年 4 月から令和 3 年 6 月までの 26 ケ月間で、診察前に足浴、皮膚の性状や白癬の病勢を観察し、足浴後に保湿および軟膏塗布、爪の手入れを実施し前後に写真撮影を行い経過を記録した。開始当初は気の進まない様子だったが、次第に自身の足に関心を持つようになり、意識の向上が伺えた。フットケアを通した心理変化から介護サービスの利用を開始し、施設および診療所間で連携した質の高いケアを行うことができた。白癬も治癒し、歩行機能の維持へと繋げることができた。

フットケアを行うことで、足全体に圧力が加わり把持力が向上し転倒予防効果があるとされる。本症例においてもその効果は確認されており、加えて介護施設を利用されるなど介護者の負担軽減にも繋がり、医療－介護－福祉の間で身体状況の情報共有もできた。高齢化が進行する社会において、高齢独居や老々介護、介護者の負担は増えている。フットケアの重要性を発信し広めることで、患者およびその家族が安全・安心な生活を送れる社会づくりの一助になると考える。

演題番号8

白鳥ブランドの予診を目指して

県北西部地域医療センター国保白鳥病院
看護師　○山下美由紀　狩野友子　日置実香
医師　　廣瀬英生

【背景・目的】
当院総合診療科外来では、令和 4 年 2 月より、総合診療科において、医師の診察の前に、看護師による予診を行っており、多職種での外来のかかわり、患者の思いをより深く聴くことに関して取り組みを行っている。一方、医師、看護師で予診の存在意義について網羅的に調査したことはない。
【方法】
対象は、当院医師及び外来看護師である。Google form を用いて、自記式の無記名のアンケート調査を行った。アンケート調査内容は、予診の必要性、予診の意義である。10 段階の VAS スケールを用いて測定し、数字が高い方が各項目に対してポジティブに解釈している。
【結果】
回答は、医師 12 名、看護師 12 名から得られた。VAS スケールの平均を比較すると、予診の必要性（医師 8.5 vs 看護師 4.7)、予診の意義についての質問で、家族背景生活背景を探ること（医師 7.5 vs 看護師 7.5)、医師に話せないことを探ること（医師 7.3 vs 看護師 6.6)、病気の早期発見（医師 4.9 vs 看護師 5.6)、ACP の聞き取り（医師 6.6 vs 看護師 4.9)、バイタルサインの測定（医師 8.1 vs 看護師 6.0)、糖尿病など生活習慣病の指導（医師 7.3 vs 看護師 5.8)であった。自由意見として、医師からは質の統一の必要性がある、看護師からは、時間の余裕がないなどの意見がみられた。
【結語】
予診の必要性に関しては、医師看護師間で大きな乖離が認められた。また、意義についても、一部乖離が認められた項目があった。今後職種間での議論を重ねつつ、意義の確認、質の向上を目指していきたい。

演題番号9

訪問看護ステーションでの移動時間確保

県北西部地域医療センター国保白鳥病院
看護師　○鷲見みづほ

【はじめに】国保白鳥病院訪問看護ステーションで疑問に感じたことは、移動時間がとってないため、訪問時間を削って移動していること。またへき地であり、移動距離が長いことで焦りが出て安全運転がおろそかになることであった。今回、訪問予定時間を変更し移動時間が取れるよう調整し、半年が経過したところで評価してみた。

【研究方法】当院訪問看護師7名にアンケート調査を行い単純集計。

【経過】30分につき5分の移動時間を入れることでトータル午前30分、午後30分の移動時間が確保できる案を出したが、時間が複雑など反対意見がほとんどであったため、メリット・デメリットを洗い出し、話し合いを重ね実施となった。メリットは、あせらなくていい、プラスαのケアができる。記録の時間が確保できる等である。またデメリットは、訪問時間が複雑になる、会議などの時間の確保が必要等であった。

【結果】時間変更の半年後にスタッフに自由記載のアンケートを施行。良くなった・3.5人　変わらない・2.5人　悪くなった・1人であった。良くなった意見として、移動時間があり時間に余裕がある、交通事故回避ができている、1日に訪問する件数が減って体力的にありがたい、ゆっくりお話ができる、雪の時は良い、であった。悪くなった意見として、時間が細かいため動きにくい、スタッフの訪問予定を組むのが大変、訪問時間の変更が増えたなどがあった。半数が良くなったと答え、体力的な面や、ゆっくりお話ができるということ、また事故回避にもつながるとあり、一定の評価は得られた。

【終わりに】ケア以外の看護の必要性を強く感じスタッフに今回の提案を行った。移動時間をとったことで余裕がある訪問が出来、サービス向上や安心感につながると考える。訪問看護ならば家族を含めた看護ができるということを再度認識し、地域に根差した看護を行っていきたい。

演題番号10

食べることを大切にできる子の育成の取り組み ～保護者・園・学校・行政で連携する 明宝学校地域保健連絡会～

郡上市健康福祉部健康課
保健師　○早川由美子　末武麻悠子
直井千鶴　水口智美
県北西部地域医療センター
医師　後藤忠雄

【背景・目的】当市では保護者・園・学校・行政が連携・協働し、子ども達の健康課題やめざす姿を共有し、事業の充実強化を図ることを目的とした「学校地域保健連絡会」を開催している。市内の一地域である明宝地域での取り組みについて検討する。

【方法】明宝地域の子どもに関わる関係者 12 名（代表校長、養護教諭、園長、保護者、乳幼児家庭教育学級担当者、保健師等）で年 2 回の会議を開催。平成 20 年度から活動テーマを「食べることを大切にできる子の育成」とし、平成 23 年度からめざす姿を「中学校卒業までに自分で料理を作れる」「自分の健康を考えた食事を選ぶことができる」とした。めざす姿を共有しながら家庭教育学級や PTA などの保護者を中心とした活動を中心に、学校や園と家庭での取り組みを計画・実践し、毎年通信を発行してめざす姿や活動の情報提供をした。コロナ禍で活動が制限された時期にも、家庭での取り組みを継続した。令和 3 年度には各年代のめざす姿と評価目標を決定し、より具体的な活動を実践、令和 4 年度からは子どもの食のアンケートも実施した。今後は活動を継続し、令和 6 年度に評価する予定である。

【結果】保護者・園・小中学校、地域全体で共通目標を持ち、子どもたちへの指導・啓発を継続したことや、活動内容の検討を重ねることで、取り組みの浸透が得られた。各年代の子どもの関係者で検討することで、多角的な意見交換や、取り組みの連携強化が可能であった。アンケートによる数値目標を設定したことで、達成基準が明確となり、それに向けて、現状を考慮しながらも活動を計画し、実践できるようになった。

【結論】保護者を含めた多職種からなる組織で、共通理念を設定し PDCA サイクルに準じて取り組みを継続・実施することは、地域の子どもの健康づくりに寄与すると思われる。

演題番号11

飛騨市の子育て世代における塩分摂取状況について

飛騨市保健センター
保健師　川瀬　春香

【背景】飛騨市では平成３０年度より「飛騨市減塩プロジェクト」と題して、幅広い世代に向けて高血圧予防を目的とした減塩に関する施策を実施している。
【目的】飛騨市の子育て世代の塩分摂取状況を把握するため。
【方法】令和４年度に実施した２歳児を持つ保護者への尿中塩分検査の結果と、併せて実施した食事アンケートの結果から飛騨市の子育て世代の塩分摂取状況を調査した。尿中塩分検査については基本統計量を算出した。食事アンケートの回答は順序尺度で数値化し、尿中塩分検査との相関係数を求めた。また身長・体重から BMI を算出し尿中塩分量との相関係数を求めた。
【対象者】対象者は令和４年度２歳児相談参加保護者のうち同意が得られた６４名であった。ここから食事アンケート、尿のいずれかが未提出の４名を除外し、６０名分のデータを分析対象とした。
【結果】尿中塩分検査の結果は平均値が 8.23ｇ、中央値 8.25ｇであった。日本人の食事摂取基準と比較すると 1.7ｇ近く上回っているという結果だった。また、尿中塩分量と食事アンケートの質問項目で相関係数を求めたところ最も相関係数が高かったのは尿中塩分量と夕食に外食や惣菜を食べる頻度であった。次いで BMI、昼食に外食や総菜を食べる頻度と尿中塩分量との相関係数が高い、という結果であった。
【考察】飛騨市では H30 年度から飛騨市減塩プロジェクトを実施している。本事業のなかで実施している市内飲食店との健康食(スマートミール)の開発は、子育て世代の食塩摂取量の減少には有効である可能性が示された。また今年度には飛騨市まるごと健康食堂と題して市内飲食店とともに従来メニューを減塩化し提供する予定である。今後も家庭向けの健康教育とあわせて市内の飲食店や食料品店などを巻き込んだ食環境整備にも力をいれていきたい。

演題番号12

山間部の拠点病院における ソーシャルワーカーの外部連携

国民健康保険上矢作病院
医療相談員　○伊藤貴範

国民健康保険上矢作病院（以下、当院）は、恵那市南部の上矢作町に位置する。かかりつけ患者は主に恵那市南部地域、中津川市阿木地区、豊田市稲武地区で、この地域では唯一の有床病院である。恵那市南部のみで名古屋市とほぼ同じ面積があり、山間部の拠点病院として、広範囲の地域医療を担っている。また、地域の高齢化・過疎化も顕著である。上矢作町を含む、恵那市南部５地区の高齢化率は、令和５年９月末現在で約４２．５％に上る。近隣エリアも同様に高齢化が進んでおり、当院入院患者の８割以上が後期高齢者という現状である。

このような状況下において、当院がこれからも地域住民から頼られる存在であり続けるため、私たちは救急医療・治療・リハビリ・保健・予防・福祉にいたるまで、包括的医療の展開を目指している。そのために欠かせないものが「外部連携」であり、地域に根ざした病院を目指し、当院ではソーシャルワーカーがその中心を担っている。

その取り組みのひとつである「地域ケア会議」は、多職種・施設間連携の定例会議である。地域に暮らす高齢者や要介護者が、住み慣れたまちで可能な限り「自分らしい」生活が送れるよう、情報交換や事例検討を行っている。会議をとおして、課題解決への新たな気付きや、実際に地域で動く支援者ネットワークの強化に繋がっている。

また「健康福祉部会」では、上矢作地域自治区の地域計画のひとつである「地域ぐるみで健康長寿なまちづくりを目指す」ことに取り組んでいる。当院からは保健師とソーシャルワーカーが部会員としてその事業に参加し、住民・行政との連携を深めている。当院を核に地域医療を守っていきたいという住民の声や要望、地域ニーズなどを直接聞くことができる貴重な場となっている。

演題番号13

サロンマップ
～地域活動へつなげる取り組み～

県北西部地域医療センター国保白鳥病院　地域連携室
社会福祉士　○尾藤陽介
保健師　河合志織
医師　伊左次悟　廣瀬英生　後藤忠雄

【目的】
高齢者の外出頻度増加や社会的交流活性化等のため地域のサロン活動を利用していただくよう紹介できる体制づくりとヘルスプロモーション活動を含めた地域との繋がりを構築するために郡上市北部地域(高鷲町、白鳥町、大和町)のサロンマップを作成する。

【方法】
市社会福祉協議会へ市北部地域にあるサロンの、また市地域包括支援センターへ公民館や集会所で実施する活動の情報提供を依頼、サロン代表者より参加許可を得たサロンに実際訪問した。こうしたプロセスを経てすべてのサロンの会場や活動内容スケジュール、参加人数等を把握・記録して町ごとに分けたサロンマップを作成した。

【結果】
市北部地域のサロンの数は、高鷲町 16 か所、白鳥町 32 か所、大和町 32 か所であった。うち 9 か所のサロンに訪問し、茶話会や歌唱活動、体操・レクリエーションなど様々な活動内容、参加者の年代や会場の把握ができ、これらをもとにマップ作成が可能であった。

【結論】
市北部地域全域のサロンマップを作成した。今後はサロンマップをもとに当院職員へもサロンを周知し、活動を促したい方やサロンに参加したい方へ向けて紹介できる体制を構築していく予定である。

第　２　会　場

セクション５　　No.１４～No.１７

セクション６　　No.１８～No.２０

セクション７　　No.２１～No.２３

セクション８　　No.２４～No.２６

演題番号14

病院職員の健康における食事療法の有用性
～ケトジェニックダイエットプロジェクトの成果～

国民健康保険飛騨市民病院
医師　工藤　浩
看護師　○山端美奈子　稲松絵美　田口純子　山本里美
南下夏美　星合紀美子　小林洋子
薬剤師　大田理絵
管理栄養士　日比野一輝
理学療法士　谷口敬康　洞口拓也
作業療法士　今井亮貴　北平昂也

【目的】ケトジェニックダイエットとは、白澤らにより体系化された食事法であり、低糖質・高タンパク質摂取により自身の体脂肪由来の脂肪酸でケトン体を増やし、 健康を目指す食事療法である。今回、参加を希望した当院職員24例が栄養サポートチーム主導によるケトジェニックダイエットを6ヶ月間行い、その効果について検討した。

【方法】糖質制限による食事療法についてのレクチャー後、以下の食事法継続を指示した。①糖質制限（120ｇ/day以下）②タンパク質摂取（自分の体重×1g/day 以上 ）③中鎖脂肪酸（MCT、ココナッツオイル）の積極的な摂取 ④週に一度はプチ断食（オートファジー誘導のための 16 時間絶食）⑤週3回の筋トレ（スクワット10回×3セット）。希望者にはフリースタイルリブレを貸し出し、食事と自己血糖上昇の相関を自覚してもらった。食事療法前と6ヶ月後の体重、BMI、腹囲、体脂肪率、骨格筋量、内臓脂肪レベル、血中ケトン体、体調の変化について評価した。また副次評価として、職場健診を利用した採血結果についても検討を行った。

【結果】体重（61.8→60.2：-1.6kg, $p<0.01$）、BMI（23.9→23.3：-0.6, $p<0.01$）、腹囲（83→79：-4cm, $p<0.01$）、内臓脂肪レベル（8.5→7.5：-1.0, $p<0.01$）について有意に改善がみられた。特に内臓脂肪の減少が顕著であった。採血検査では HDL(66→71, $p<0.05$)、BUN(15.3→17.8, $p<0.05$)が変化がみられたが、その他有害事象は認めなかった。体調の変化においても、慢性頭痛の改善、食後の眠気の減少、抜け毛の減少、肌の調子が良くなった等の意見が得られた。

【結論】ケトジェニックダイエットによる病院職員の肥満、体調改善の効果が確認できた。今後は日常診療における、成人病の予防、改善効果についても検討していきたい。

演題番号15

「持たない・割かない・増やさない」画期的な研修医住宅整備手法～快適で喜ばれる研修環境が身軽な病院経営をもたらしてくれた～

国民健康保険飛騨市民病院
事務局　○佐藤直樹　白鳥沙弥香　古田幸嗣　豊坂梨緒
大坂　学　金山博文　林下明史
医師　黒木嘉人

【序章】清潔で快適な住環境でこそ疲れた心身がリフレッシュされ、最高のポテンシャルで翌朝を迎えられる。研修医の「一日も早いひとり立ち」と「頼れる医師への成長」を支援する目的で研修医住宅を整備する。
【本論】プライベート空間は襖を石膏ボードで隔てた８畳の居室のみ、風呂とトイレは共有の「まるで大人の合宿所」は、春秋には大量発生したカメムシが飛び交う館。その光景に日ごとにふさぎ込む虫嫌いな研修医を救出し、安住を低廉に確保することが今回のミッションであった。
そこで、従来型の市直営で建設して病院資産に組み入れる手法から脱却し、当院が求める仕様を提示して公募するプロポーザル方式を採用したことで、賃貸業務に精通した民間のノウハウが活用できた。具体的内容は、事業者が自ら確保した土地に新築した１棟６戸の集合住宅を当院が丸ごと借り上げるもので、冷蔵庫やベッドといった家電や調度品の設置と退去時の清掃や除雪などの施設管理を包含したものである。これにより、利用者はホテル感覚のわずかな所持品で生活がスタートできる。
【終章】結果として、公共工事と比べて低コストで管理の行き届いた研修医住宅が調達できた。病院側にとっては劇的な業務改善が実現し、残された実務は利用者の調整とリネン類の準備程度となった。
また、住居のうちの１戸を他のどの部屋の鍵でも開閉できる共有ルームとした工夫により、各地の病院から集まった研修医同士が会食やラウンジスペースとして気軽に立ち寄ることができ、親密な関係性が構築される上、自室は完全なパーソナルスペースとして確保できる点で、研修の質と環境の飛躍的な向上が図れた。
【考察】賃貸業者は10年の契約期間中の満室が保証される点において、賃借する当院は資産管理や施設管理から開放される点において、双方にとってメリットの大きい手法であることが実証された。

演題番号16

介護認定審査会のオンライン実施への移行に関する実績と課題について

郡上市健康福祉部高齢福祉課
○山岡友哉　西川美香　瀧下亜由佳
山口真弓　山下修司

【背景・目的】郡上市の介護認定審査会は１２合議体、委員４２名で構成されている。令和３年度までは年間７６回にわたる審査会を全て対面形式で開催していたが、移動時間や新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、令和４年６月からオンライン形式に切り替えたので、その成果と課題に関して検討する。

【方法】介護認定審査会総会において審査会をオンライン形式に移行することを承認いただいた。一部オンライン開催に関し機器操作等に不慣れであるという委員も認められたが、必要に応じ職員が補助を行いながら順次移行した。審査会資料の紛失・情報漏洩防止に関しては、約１週間前に職員が委員の職場に直接配布し、審査会翌日に回収を行い、使用後はシュレッダー等で処理することで対応した。

【結果】オンライン形式に移行した成果としては、①委員が職場や自宅から審査会に参加することが可能となり移動時間が削減、②感染症まん延期においても安全に審査会の開催が可能、③会議室の準備等に係る職員の労力が削減、④録画機能による審査会の精密な記録が可能、等が挙げられた。一方課題としては、引き続き審査会資料は紙媒体のため、①移動や保管に伴う紛失等のリスクが存在、②印刷・製本、配布・回収の事務作業についての不効率さが未解消、等が挙げられた。

【結論】オンラインでの介護認定審査会を開始したことで、感染症対策及び業務効率化について一定の効果が認められた。今後、情報の機密性や更なる業務効率の向上をめざし、審査会資料の電子化を検討していく予定である。

演題番号17

第３期郡上市国保データヘルス計画策定に取り組んで

郡上市健康福祉部保険年金課・健康課
事務　○若園紗矢香　山本恵子　石田　紡
鷲見英樹
保健師　橋本吾貴子
栄養士　村瀬妙子
医師　後藤忠雄

【背景・目的】政府は「日本再興戦略」において全ての健康保険組合に対し、被保険者の健康保持増進のための事業計画として「データヘルヘルス計画」の策定を推進している。当市においても本年度から令和６年度～令和１１年度を計画年度とした第３期計画策定に向け取組みを開始しており、その策定プロセスについて検討する。

【方法】当計画の策定プロセスは①第２次郡上市健康福祉推進計画を上位計画とし、健康づくり計画と整合性を図ったうえで第４期特定健康診査等実施計画と一体的に作成、②県と国保連合会から計画作成の支援・助言を受け、国保データベースシステムより健診・介護・医療情報の分析・評価を行い、当市の地域性を踏まえた健康課題を抽出、③抽出した課題解決に向けた個別取組事業の評価・指標の設置と計画素案を作成、国保運営協議会や健康づくりに関わる市民等からの意見収集を実施の上、修正し計画暫定版を作成、④議会報告とパブリックコメント実施後、３月に完成版を公表といった工程を計画した。

【結果】策定プロセスを明確化することで今後の取り組みが関係者間で共有できた。国保データベースシステムからの課題抽出が中心とはなるものの、第２次郡上市健康推進計画の優先健康課題である「認知症を防ぎ支えること」との整合性、当市の地域性や被保険者の年齢層に沿った多角的・複合的な視点からの検討、後期高齢者を見据え介護事業も配慮した一体的な計画作成等が必要であると考えられた。

【結論】策定プロセスの明確化は可能であった。より実効性のある計画を策定するためにも当市の地域性への配慮や関連計画や事業との整合性を図りながら取り組むことへの重要性が再確認できた。

演題番号18

人材確保・教育に懸けた「里山ナース®院内認定制度」～5年の歩みとその成果～

国民健康保険飛騨市民病院
看護師　○岩﨑美幸　宮腰結衣　中野亜李紗
逢坂ゆきみ　後藤弘子　荒家千夏
管理課　豊坂梨緒　古田幸嗣　佐藤直樹
医師　黒木嘉人

【目的】地域に特化した独自の「里山ナース®院内認定制度」を構築し、看護師成長と地域貢献度を可視化して発信する。これにより「一緒に働きたい」に繋がる人材育成と人材確保を成果とする。

※「里山ナース®院内認定制度」は、救急から急性期看護、慢性期看護～看取り期まで「いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護の提供」を行い、地域貢献できる看護師教育制度であり、3段階でステップアップする。

【方法】2018年9月開始

①幹部・行政政策協議に「事業企画書」を提出

②人材育成プロジェクトチーム（以下JIP）を組織化し運用

【結果・考察】病院幹部会議と行政政策協議に「事業企画書」を提出し、納得できる的確なデータでの危機意識の共有が病院全体、市長を巻き込んだ制度の構築に繋がったと考えられた。院内ではJIPチームを組織化し、問題を明確化し危機意識を高め、適切なビジョン（目標）を設定できたことで軌道に乗せることができたと考察する。若手看護師と教育プログラムの作成を行った事で、より現場の看護師が求める制度となった。JIPチームだけでなく、他の職員の柔軟な発想や提案を取り入れる組織文化が、病院全体で盛り上がる要因であったと考える。キャラクターの考案や、「里山ナース」の商標登録もそのひとつである。インセンティブの付与と期間の長期設定は、各自が自律的にとり組むシステムとして、自分のペースで進めることができると考えられる。ファースト（SUPER）では2019年度28名の修了者に、市長から修了証とバッジが手渡された。2020年度は5名、セカンド(HYPER)では、2021年度7名、2022年度7名に修了証とキャラクターの刺繍が入ったスクラブ、バッジを付与した。病院全体目標発表会での修了式は、短期成果を見える形として院内外に情報発信できた。様々な活動により、2022年には1名、2023年には2名の新人採用に繋がったと考察する。

今後は教育制度を次世代に繋ぐ対策を講じることが課題である。

演題番号19

当地域医療センターにおける「総合診療」に対するスタッフの意識調査の変化について
～「総合診療カフェ」の開催を通して～

県北西部地域医療センター国保白鳥病院
医師　○廣瀬英生　伊左次悟　後藤忠雄

【背景】
基幹病院（46 床・全病床地域包括ケア病床）と複数の診療所から構成される当センターは 2015 年に設立された基幹病院と複数の診療所をもつ、それまでの臓器専門科体制から地域医療センターであり、総合診療科を核とした地域医療の展開へシフトした。今回全職員を対象に「総合診療カフェ」を開始し、スタッフへの「総合診療」に対する啓発活動を行ったが、認識・理解度にどの程度の変化が生じたかは不明である。
【目的】
スタッフ間の「総合診療」に対する概念を介入前後で比較すること
【方法】
県北西部地域医療センター内のスタッフを対象に、「自身の総合診療の定義」を聴取し、テキストレポートからのキーワード抽出を用いた計量的テキスト分析
総合診療カフェ実施前と実施後に調査を行った。
【結果】
介入の前では、「内科」「外科」「紹介」「専門医」等のキーワードが多く認められ、カフェ後では、「自分」「家族」「全体」「地域医療」のキーワードが多くみられることが分かった。
【結語】
総合診療医を内科～外科といった幅だけでなく、地域、家族という面としてとらえる傾向が認められた。

演題番号20

医学生の早期体験実習の受け入れを経た当診療所職員の受け入れの実際と効果について

高山市国民健康保険久々野診療所
医師　○児玉一貴　　阪　哲彰
水野麻優子　川尻宏昭

【背景】今年度、高山市と岐阜大学医学部が医療人育成等を目的とした覚書を締結したことを機に、同大学医学科1年生の早期体験実習（以下、実習）の受け入れをすることになった。近年の医療福祉系学生の実習効果を研究した文献では、実習の在り方や学生の実習効果の報告が散見されるが、受け入れ側の視点で述べられている文献は数少ない。初年の受け入れとなったこの機会に、今回の受け入れの実際と受け入れ側となった当診療所職員にもたらされた効果について調査し、ここに報告する。
【方法】実習で医学生に関わった当診療所と国保朝日診療所に勤務する職員（医師、看護師、医療事務）22名を対象に、実習後に質問紙調査を実施した。①実習受け入れの経験や自身の学生時の実習経験の有無、②受け入れに際して不安や負担であった点、③自身または診療所にとって有益であった点、④今後の実習受け入れの是非などについて多肢選択やリッカート尺度を用いて設問し、結果を集計し分析した。
【結果】受け入れの経験を有する職員は11名であった。実習前の不安や負担である点で最も多かった回答は「学生とのコミュニケーション（45%）」であり、次いで「学生の実習態度（27%）」「自身の業務への支障（23%）」であったが、いずれも受け入れ後には回答数の減少がみられた。有益であった点では、「自身が地域医療について改めて考えるきっかけとなった（82%）」「将来の人材確保につながる（73%）」という回答が多かった。95%の職員が次年度以降の実習の受け入れに前向きであった。
【結語】実習の受け入れは、当診療所職員にとって有意義であり、特に地域医療を再考するきっかけになった職員が多いことが示された。今後、多くの実習受け入れ機関で、受け入れの実態について、調査や傾向の分析をすることで、大学側の実習の趣旨、学習者のニーズ、受け入れ施設側の求めるところで実習の方向性を共有できるのではないかと考える。

演題番号21

当院におけるメトホルミンとビタミン B12・貧血の関係について

高山市国民健康保険朝日診療所
医師　○阪　哲彰　　清水洋範　児玉一貴
水野麻優子　川尻宏昭

2017 年の米国糖尿病学会（American Diabetes Association：ADA）で報告された Standards of Medical Care in Diabetes では、メトホルミンの長期内服患者には定期的なビタミン B12 測定を考慮すべきとの勧告がなされている。しかし実臨床としてメトホルミンの副作用で貧血悪化・加療を必要とした症例やメトホルミン内服中の患者にルーチンでビタミン B12 を測定する施設が多い印象はない。このため後期高齢者が中心である当院の定期通院患者において、メトホルミン内服がもたらすビタミン B12 や葉酸・貧血への影響を検討した。対象は平成 25 年 4 月～令和 5 年 3 月までにビタミン B12･葉酸を含めた血液検査を行ったことのある当院患者 270 人で、非糖尿病患者・メトホルミンを内服していない糖尿病患者・メトホルミンを内服している糖尿病患者間における①血中ビタミン B12 の平均値・②血中葉酸の平均値・③MCV の平均値・④ビタミン B12・葉酸の相関について比較した。

結果としてはいずれの項目においてもメトホルミンの内服有無において明らかな有意差を見いだすことはできなかった。また、メトホルミン内服患者間での 1 日内服用量・内服期間の長さ別でも評価を行ったが、いずれも有意差は見られなかった。

少なくとも 4～5 年程度の短期的観点で見れば ADA から勧告されるビタミン B12 低下に伴う貧血のリスクは危惧されるほどは高くはなく、日本のプライマリーケアの場でメトホルミンを内服している糖尿病患者全員について定期的にビタミン B12 を測定する意義は低い可能性が示唆された。今後より大規模な集団での確認のほか、長期内服での影響・測定を考慮するタイミングなどについて追加検討・知見がプライマリーケアの場から出ることを期待したい。

演題番号22

胃Ｘ線画像と H.pylori 菌抗体値の検討

国民健康保険上矢作病院
診療放射線技師　○籠橋隆司　柘植大輔　牧野伸美
医師　佐本洋介　村瀬奈佑
臨床検査技師　塚本久美子
保健師　千垣内美紀

Helicobacter pylori（ピロリ）菌の感染は、胃の発がん因子の第１群とされており、ピロリ菌感染者には積極的に除菌治療がおこなわれる。ピロリ菌に感染した胃粘膜面は、胃固有腺の萎縮や腸上皮化生、粘膜ひだ分布の縮小化、ひだの腫大化が見られる。今回、当院での 2019 年度から 2022 年度の４年間の検診受診者で胃Ｘ線検査とピロリ菌抗体値を同時に測定した 179 名（男性 129 名・女性 50 名、平均年齢 53.5 歳）の胃Ｘ線画像とピロリ菌抗体値を比較し、ピロリ菌感染の推測が可能であるか検討した。

胃Ｘ線検査は施設型検診基準撮影法２で撮影、主に背臥位二重造影画像で、胃体部の粘膜委縮度６分類（0、1a、1ｂ、2、3a、3b)、ひだの分布４区域（萎縮無し、軽度萎縮、中等度萎縮、高度萎縮)、ひだの性状４分類（正常、中間、異常、判定困難)、ひだの太さ計測を行い、ピロリ菌抗体値を陰性値（１０U/mL 未満)、陽性値（１０U/mL 以上）の２区分して検討した。

結果、胃Ｘ線画像から粘膜萎縮度、ひだの分布、性状、太さを評価することにより、ピロリ菌感染の推測が可能であった。

演題番号23

嚥下反射惹起遅延に対する、干渉波電気刺激治療の有効性について

国民健康保険飛騨市民病院　リハビリテーション科
作業療法士　○今井亮貴　井本愛李　北平昂也
医師　工藤　浩
理学療法士　巣之内大輔　谷口敬康　洞口拓也
新家祐太朗　古沢晃也　森祐加恵
新井智絵
看護師　小林洋子　稲松絵美

【はじめに】嚥下反射惹起遅延は、食事中の嚥下前誤嚥の要因となり、誤嚥性肺炎のリスクとなる。頸部への干渉波電気刺激治療(以下 IFC)は、嚥下反射惹起の改善が期待されるものであり、当院では 2021 年 11 月から、従来の嚥下リハビリテーション(以下リハ)に IFC の併用を開始したため、その有効性について検討した。

【方法】対象は 2020 年 3 月から 2023 年 3 月までに、当院入院中に嚥下内視鏡検査(以下 VE)を 2 回以上施行し、嚥下反射惹起遅延を認めた患者 44 名。従来リハに IFC を併用した 17 名を IFC 群、従来リハを実施した 27 名を対照群とした。IFC の装着はリハ時間中の 20 分間で設定し、IFC を装着する以外は両群とも従来通りのリハを実施した。嚥下反射惹起の評価は、兵藤らによる「嚥下内視鏡所見のスコア評価基準」を用いて、水またはトロミ水摂取時の嚥下反射を評価。初回の VE と比較し、2 回目以降の検査所見で嚥下反射の惹起性を改善、不変または増悪で評価し、X^2検定を用いて 2 群間の比較検討を行った。

【結果】患者背景は IFC 群と対照群で、年齢、入院時 FIM、初回 VE から 2 回目以降の VE までの日数にそれぞれ有意差は認めなかった。嚥下反射の惹起性の変化は、IFC 群では改善 13 名（76.5%）、不変または増悪 4 名(23.5%)であったのに対し、対照群では改善 13 名（48.1%）、不変または増悪 14 名（51.9%）であった。2 群間の比較検定では p=0.063 であり、統計学的有意差は得られなかったが、IFC 群で改善傾向を認めた。

【総括】当院のように言語聴覚士が常駐していない施設でも、嚥下反射惹起遅延に対して治療アプローチが可能であった。IFC を従来リハに併用することで嚥下反射惹起の改善の一助になりうると考えられた。

演題番号24

地域におけるHPVワクチン接種の実施状況に関して

県北西部地域医療センター国保和良診療所
医師　○堀　翔大　廣瀬英生
看護師　島田紫香

【目的】ヒトパピローマウイルス（HPV）は子宮頸がんをはじめとする悪性腫瘍を引き起こすウイルスであることが広く知られており、その予防としてHPVワクチンの接種が推奨されている。和良地域で行われた松久雄紀「子宮頸がん予防ワクチンに対する意識調査」(2013) 日本プライマリ・ケア連合学会誌 vol36.p297-301 の研究によると、ワクチン接種者に関して接種者の保護者に接種決定権があり、被接種者の子宮頸がんやHPV ワクチンの基礎知識に関しては十分とは言えなかったと報告がある。しかしながら2022年から厚生労働省の接種勧奨やメディアの普及に伴う、地域での接種に対しての実施状況、意識調査の変化は明らかではない。
そこで再度和良地域におけるHPVワクチン接種に関して実施状況、意識調査を実施することにした。
【方法】郡上市県北西部地域医療センター国保和良診療所において、HPVワクチン被接種者・被接種者の保護者を対象にHPVワクチン接種に関してのアンケート調査を行った。アンケートは紙媒体にて施行、回答は 1人 1回とした。アンケートではワクチン接種決定権に関して、HPVやワクチンに関しての基本的な知識に関して聴取した。
【結果】
【結論】本研究は抄録提出時点で調査中であるため、結果、結論に関しては、研究終了時点で改めて抄録記載、もしくは当日発表とする。

演題番号25

FLSチームにおける二次骨折予防に向けた取り組み

下呂市立金山病院　ＦＬＳチーム
診療放射線技師　○細江辰徳　藤井有佳
医師　杉山太郎
薬剤師　田口　宰
看護師　馬場容子　石田寿江

【はじめに】
当院は高齢化率が 40%を超えた地域にあり、高齢者が脆弱性骨折で入院することは珍しくない。従来の治療では、骨折治療が行われても骨粗鬆症治療に至らないことがあった。そこで、骨粗鬆症による二次骨折を防ぐため、骨折リエゾンサービス（ＦＬＳ）チームを立ち上げ多職種連携による治療を目指したのでその取り組みを報告する。

【目的】
骨粗鬆症の治療方針を確立することで、入院から退院後まで安定した治療および継続的なフォローを行える体制を作ることを目的とした。

【方法】
初めに、多職種によるによるＦＬＳチーム立ち上げを行った。「退院後の二次骨折の発生を防ぐ」を目標として掲げ、勉強会やカンファレンスで周知した。検査および転倒評価などのデータに基づいたレポートを作成することで、退院後の注意点を医師・看護師が患者に説明しやすいようサポートを行った。

【結果】
治療パスを作成することで骨粗鬆症評価率は令和 3 年度の 43.6%からチーム発足以降は 92%へ向上し、二次骨折発生率も 16.1%から 11.1%へと減少した。スタッフの意識の変化として、脆弱性骨折は骨折治療だけではなく、骨粗鬆症治療も併せて行うことへの意識づけができた。そのため、患者に退院後の継続的治療の必要性を説明できるようになった。現在までに外来治療の離脱者は発生していない。

【まとめ】
パスの作成および多職種介入を行うことで、適切な骨粗鬆症治療が行われるようになり、二次骨折の発生率を減らすことができた。

演題番号26

東白川村民の死因と看取り場所の変遷

東白川村国保診療所　内科
医師　○神谷理斗　北川浩司

【目的】東白川村民の寿命と死因、看取り場所が変化してきていると感じ、実際どうであるか調べてみた。
【方法】1997 年から 2022 年までの 26 年間に亡くなった 1,077 人を対象に、死亡診断書を中心とした調査で、死亡年齢、死因、死亡場所を調べた。調査期間を 3 期（前期 1997～2005 年、中期 2006～2014 年、後期 2015～2022 年）に分け変遷をみた。
【結果】平均死亡年齢は、男性で前期 75.3 歳、中期 77.9 歳、後期 82.4 歳、女性で前期 79.8 歳、中期 86.4 歳、後期 88.1 歳であった。長寿化は男女とも進んだが、中央値では、男性で前期 78 歳、中期 81 歳、後期 85 歳、女性で前期 81 歳、中期 88 歳、後期 89 歳であり、すでに長寿であった女性では死亡年齢の中央値が後期は伸びなかった。これは寿命の伸びしろが小さくなっていることを示唆している。死因の割合は男女とも悪性腫瘍、脳血管疾患が減少し、老衰と心疾患が増加したが、肺炎は男性で増加、女性で減少していた。後期でみると、悪性腫瘍は男性で 28.3%、女性で 24.7%、肺炎は男性で 19.5%、女性で 14.4%、老衰は男性で 9.4%、女性で 23.3%であった。看取りの場所は、当院が病院から診療所に転換した平成 20 年以降自宅が減っていたが、平成 29 年頃より持ち直し、同じ頃より施設での看取りも増えたことで、近年の病院での看取りは半数程となっていた。
【結論】疾患死亡が減り老衰が増えて、長寿化は進行しているが、女性では伸びしろが小さくなった。施設看取りが増加し、病院死亡が減少してきていた。

参　　考

Ⅰ．岐阜県国民健康保険診療施設紹介

Ⅱ．第２８回岐阜県国保地域医療学会

実行委員会　委員名簿

Ⅲ．第６４回全国国保地域医療学会開催概要

Ⅰ． 岐阜県国民健康保険診療施設紹介

岐阜県国民健康保険診療施設診療施設一覧表　（令和５年４月１日現在）

保険者名	診　療　施　設　名	施設代表者	電話番号
大 垣 市	大垣市国保上石津診療所	河　合　秀　子	0584-45-2014
高 山 市	高山市国保清見診療所	清　水　洋　範	0577-68-2201
〃	高山市国保江黒出張診療所	(兼)清水　洋範	0577-67-3211
〃	高山市国保大原出張診療所	(兼)清水　洋範	0577-69-2132
〃	高山市国保荘川診療所	熊　田　裕　一	05769-2-2009
〃	高山市国保久々野診療所	児　玉　一　貴	0577-52-2074
〃	高山市国保久々野東部出張診療所	(兼)児玉　一貴	0577-52-2156
〃	高山市国保久々野南部出張診療所	(兼)児玉　一貴	0577-52-2621
〃	高山市国保朝日診療所	阪　　哲　彰	0577-55-3008
〃	高山市国保秋神出張診療所	(兼)阪　　哲彰	0577-56-1003
〃	高山市国保高根診療所	川　尻　宏　昭	0577-59-2014
〃	高山市国保日和田出張診療所	(兼)川尻　宏昭	0577-59-2258
〃	高山市国保栃尾診療所	井　上　　悟	0578-89-2053
関　　市	関市国保洞戸診療所	安　福　嘉　則	0581-58-2201
〃	関市国保板取診療所	馬　嶋　　隆	0581-57-2153
〃	関市国保津保川診療所	廣　田　俊　夫	0575-49-3016
中津川市	中津川市国保坂下診療所	高　山　哲　夫	0573-75-3118
〃	中津川市国保川上診療所	(兼)伴　信太郎	0573-74-2400
〃	中津川市国保加子母歯科診療所	島　倉　英　州	0573-79-2658
〃	中津川市国保蛭川診療所	猿　渡　　凌	0573-45-2201
〃	中津川市国保阿木診療所	伴　信　太　郎	0573-63-2900

保険者名	診　療　施　設　名	施設代表者	電話番号
恵　那　市	恵那市国保三郷診療所	重　光　良　雄	0573-28-1070
〃	恵那市国保飯地診療所	板　橋　雄　二	0573-22-3027
〃	恵那市国保岩村診療所	前　野　　禎	0573-43-2572
〃	恵那市国保山岡診療所	改　田　　哲	0573-56-2655
〃	恵那市国保串原診療所	村　瀬　奈　佑	0573-52-2925
〃	国保上矢作病院	西　脇　巨　記	0573-47-2211
〃	恵那市国保上矢作歯科診療所	石　黒　幸　司	0573-47-2222
土　岐　市	土岐市国保駄知診療所	塚　本　英　人	0572-59-2101
本　巣　市	本巣市国保本巣診療所	山　本　剛　史	0581-32-5211
〃	本巣市国保根尾診療所	金　武　康　文	0581-38-2571
飛　騨　市	国保飛騨市こどものこころクリニック	藤　江　昌　智	0577-57-7110
〃	国保飛騨市河合診療所	根　尾　実喜子	0577-65-2020
〃	国保飛騨市宮川診療所	根　尾　　浩	0577-63-2009
〃	国保飛騨市杉原診療所	(兼)根尾　　浩	0577-62-3006
〃	国保飛騨市民病院	黒　木　嘉　人	0578-82-1150
〃	国保飛騨市袖川診療所	小田切　春　洋	0578-82-1155
〃	国保飛騨市山之村診療所	(兼)小田切春洋	0578-82-5505
郡　上　市	県北西部地域医療センター国保小那比診療所	廣　瀬　英　生	0575-69-2011
〃	県北西部地域医療センター国保白鳥病院	後　藤　忠　雄	0575-82-3131
〃	県北西部地域医療センター国保石徹白診療所	藤　川　　耕	0575-86-0011
〃	県北西部地域医療センター国保高鷲診療所	澤　　ききょう	0575-72-5072
〃	県北西部地域医療センター国保和良診療所	堀　　翔　大	0575-77-2311

保険者名	診　療　施　設　名	施設代表者	電話番号
郡 上 市	県北西部地域医療センター国保和良歯科診療所	南　　温	0575-77-4008
下 呂 市	下呂市立小坂診療所	草　壁　駿　輝	0576-62-2212
〃	下呂市立金山病院	須　原　貴　志	0576-32-2121
〃	下呂市立馬瀬診療所	柘　植　碩　夫	0576-47-2152
関 ケ 原 町	国保関ケ原診療所	森　島　眞理子	0584-43-1122
揖 斐 川 町	藤橋国保診療所	酒　井　美千絵	0585-52-2100
〃	坂内国保診療所	(兼)酒井美千絵	0585-53-2107
東 白 川 村	東白川村国保診療所	北　川　浩　司	0574-78-2023
白 川 村	県北西部地域医療センター白川村国保白川診療所	元　田　晴　伸	05769-6-1019
〃	県北西部地域医療センター白川村国保平瀬診療所	(兼)元田　晴伸	05769-5-2019

第２８回岐阜県国保地域医療学会実行委員会委員名簿

役　職	職　　名	氏　　名	備　考
学会長	東白川村国保診療所長	北　川　浩　司	
副学会長	恵那市国保岩村診療所長	前　野　　禎	
委　員	国保飛騨市民病院管理者兼病院長	黒　木　嘉　人	
〃	県北西部地域医療センター センター長兼国保白鳥病院長	後　藤　忠　雄	
〃	県北西部地域医療センター国保小那比診療所長 （県北西部地域医療センター国保白鳥病院　副院長）	廣　瀬　英　生	
〃	下呂市立金山病院長	須　原　貴　志	
〃	国保上矢作病院長	西　脇　巨　記	
〃	県北西部地域医療センター国保和良歯科診療所長	南　　温	
〃	高山市国保高根診療所長	川　尻　宏　昭	
〃	恵那市国保上矢作歯科診療所長	石　黒　幸　司	
〃	岐阜県市町村保健活動推進協議会保健師部会部会長	國　井　真美子	
〃	東白川村国保診療所　事務局長	安　江　輝　彦	
〃	岐阜県国保連合会事務局長	三田村　雅　司	
〃	岐阜県国保連合会健康推進課長	松　原　由　真	
オブザーバー	岐阜県国民健康保険課主事	折　戸　貴　哉	

※令和５年４月１日以降の役員により構成

第６４回全国国保地域医療学会

○メインテーマ

地域包括医療・ケアで地域の「絆」をより強く

～地域医療学会発祥の地「イーハトーブ」から未来へ発信～

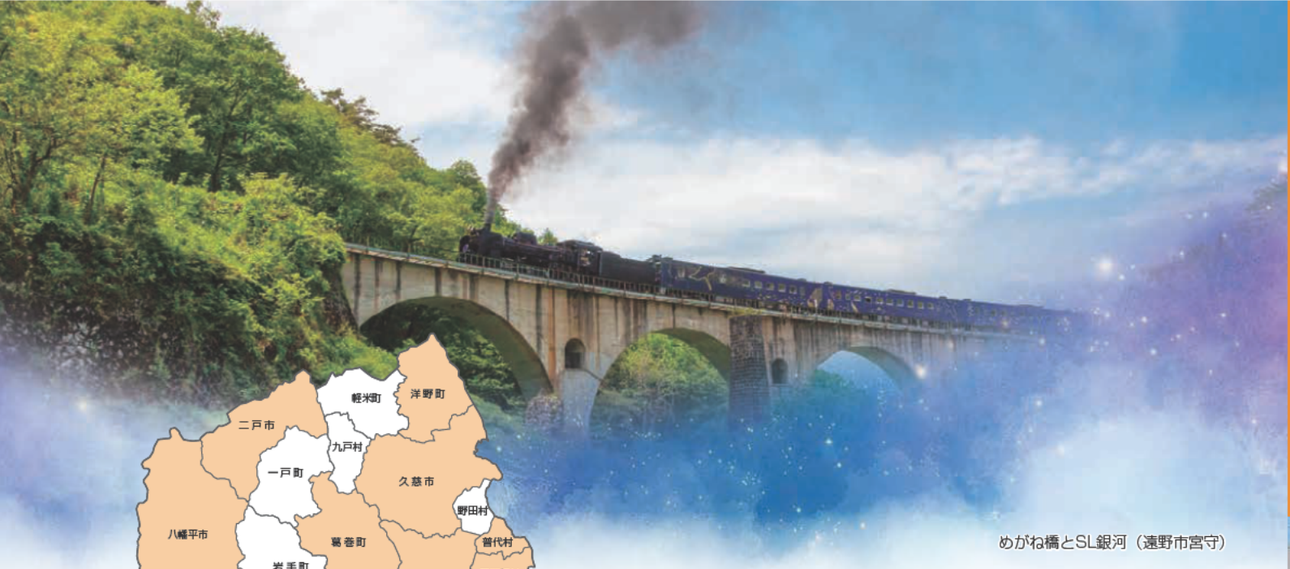
○会　期

令和６年１０月４日（金）・５日（土）

○会　場

いわて県民情報交流センター　アイーナ

ホテルメトロポリタン盛岡　ＮＥＷ ＷＩＮＧ



めがね橋とSL銀河（遠野市宮守）

わんこそば

盛岡冷麺

じゃじゃ麺

IWATE

北山崎（田野畑村）

龍泉洞（岩泉町）

中尊寺金色堂（平泉町）

錦秋湖大滝（西和賀町）

三陸鉄道（普代村）

奇跡の一本松（陸前高田市）

八幡平ドラゴンアイ（八幡平市）

猊鼻渓（一関市）

このシンボルマークは、保健・医療・福祉の三つの輪が渾然一体となって連携し、包括医療に取り組む国診協の姿をイメージしたものです。

公益社団法人
全国国民健康保険診療施設協議会
https://www.kokushinkyo.or.jp/

第64回

全国国保地域医療学会

開　催　概　要

地域包括医療・ケアで地域の「絆」をより強く

～地域医療学会発祥の地「イーハトーブ」から未来へ発信～

盛岡市内を流れる北上川と岩手山

会期　令和6年10月4日(金)5日(土)

会場　いわて県民情報交流センター　アイーナ
ホテルメトロポリタン盛岡　NEW WING

宮古市・浄土ヶ浜

第64回 全国国保地域医療学会 開催概要

地域包括医療・ケアで地域の「絆」をより強く

～地域医療学会発祥の地「イーハトーブ」から未来へ発信～

目的

国民健康保険制度並びに地域包括医療・ケアの理念に則り、国民健康保険診療施設関係者等が参集し、地域医療及び地域包括医療・ケアの実践の方途を探求するとともに、関係者の相互理解と研鑽を図ることを目的とする。

参加者の範囲

国民健康保険診療施設に勤務する全ての職員及び国民健康保険関係者等並びに学会及び国民健康保険の発展に志を同じくするものとする。

主催

公益社団法人全国国民健康保険診療施設協議会
公益社団法人国民健康保険中央会
岩手県国民健康保険団体連合会
岩手県地域医療研究会（岩手県国保診療施設協議会）

会期

令和6年 10 月 4 日（金）… 学会 及び 地域医療交流会
5 日（土）… 学会

会場

学会会場
いわて県民情報交流センター「アイーナ」
〒020-0045 盛岡市盛岡駅西通一丁目7番1号
TEL：019-606-1717

地域医療交流会会場
ホテルメトロポリタン盛岡「NEW WING」
〒020-0033 盛岡市盛岡駅前北通2番27号
TEL：019-625-1211

いわて県民情報交流センター「アイーナ」

ホテルメトロポリタン盛岡「NEW WING」

学会長及び副学会長

学会長
洋野町国民健康保険種市病院　院長　磯崎一太

副学会長
金ケ崎町国民健康保険金ケ崎診療所　所長　阿部俊和
奥州市国民健康保険まごころ病院　院長　伊藤正博
金ケ崎町国民健康保険金ケ崎歯科診療所　歯科長　高橋通訓

学会の内容

研究発表（口演、ポスター討論）、宿題報告、特別講演、シンポジウム、国保直診開設者サミット、展示会等

プログラム日程

第64回全国国保地域医療学会ホームページ（令和６年３月開設予定）に掲載

参加者負担金

◆学会　１人 12,000円（昼食別途申し込み　１食 1,000円）
◆地域医療交流会　１人 10,000円

申込み及び宿泊案内等

第64回全国国保地域医療学会ホームページ（令和６年３月開設予定）に掲載

事務局

第64回全国国保地域医療学会事務局
（岩手県国民健康保険団体連合会内）
〒020-0025 岩手県盛岡市大沢川原三丁目7番30号　国保会館
TEL：019-903-8353　FAX：019-622-1668
E-mail：gakkai64@iwate-kokuho.or.jp

開催担当地区事務局

〒509－1393　岐阜県加茂郡東白川村五加 3210 番地
東白川村国保診療所

ＴＥＬ　0574－78－2023
E-mail　507hospital@vill.higashishirakawa.gifu.jp

岐阜県国保地域医療学会事務局

〒500－8385　岐阜市下奈良２丁目２番１号
岐阜県福祉・農業会館内
岐阜県国民健康保険団体連合会
健康推進課　健康づくり係

ＴＥＬ　058－275－9823（直通）
ＦＡＸ　058－275－9641
E-mail　kenkou-kedu2@gifukokuho.or.jp

岐阜県国民健康保険診療施設協議会
http://www.gkren.jp/hospital/

岐阜県国民健康保険団体連合会
http://www.gkren.jp/